

思いや意図をもって音楽をつくる力を育てる小学校音楽科授業の工夫

— 音楽的な見方・考え方を働かせることを促すワークシートを活用した学習を通して —

呉市立坪内小学校 竹中 美鈴

研究の要約

本研究は、思いや意図をもって音楽をつくる力を育てる小学校音楽科授業の工夫について考察したものである。文献研究から、本研究における思いや意図をもって音楽をつくる力を「音楽を形づくっている要素に基づいた明確な考えをもち、音を音楽に構成する力」とであると定義した。この力を育てるために、音楽的な見方・考え方を働かせることを促すワークシートを開発し、そのワークシートを活用することで、聴き取ったことと感じ取ったこととを関連付けて音楽の特徴を捉えられるようにした。その結果、音楽を形づくっている要素に基づいて、思いや意図をもって音楽をつくる力を育てることができた。このことから、音楽的な見方・考え方を働かせることを促すワークシートを活用した学習は、思いや意図をもって音楽をつくる力を育てるために有効であることが分かった。

I 主題設定の理由

小学校学習指導要領（平成29年告示）音楽科の目標では、「思考力、判断力、表現力等」に関して、「音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。」¹⁾と示されている。小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編（平成30年、以下「29年解説」とする。）では、「音楽表現を工夫すること」について、「音楽づくりの学習においては、実際に音を出しながら音楽の全体のまとまりなどを考えたりして、どのように表現するかについて思いや意図をもつことである。」²⁾と示されており、音楽表現を工夫するには、思いや意図をもつことが必要だと捉えられる。また、「29年解説」では、音楽表現を工夫するためには、音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考えることが必要であると示されている。このことは、同じく「29年解説」で示された「音楽的な見方・考え方」と大きく関わる。「音楽的な見方・考え方とは、『音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること』であると考えられる。」³⁾と示されている。以上のことから、児童が思いや意図をもつには、音楽的な見方・考え方を働かせることが重要だと捉え

た。

国立教育政策研究所による「小学校学習指導要領実施状況調査教科等別分析と改善点（音楽）」（平成27年）では、質問紙調査において、「歌ったり楽器を演奏したり音楽をつくったりするときに、自分はこう表したいという願いや考えをもつようにしている。」と回答した児童は63.6%であり、児童は音楽の特徴を感じ取りながら、思いや意図をもって音楽表現をすることが十分とはいえないと述べられている。所属校でも同様の傾向があり、その要因として、児童が思いをもっている、その実現に向けて、音楽の特徴と関連付けて表現の工夫を考えるための手立てが不十分であったためだと考えられる。

そこで本研究では、音楽的な見方・考え方を働かせることを促せるように、聴き取ったことと感じ取ったこととを関連付けやすくするためのワークシートを開発する。ワークシートは、絵や図、文字などを用いて簡易的に示し、視覚的に捉えられるようにすることで、自己のイメージと音楽の特徴とを関連付けて表現することを促せるようにする。また、ワークシートは、音楽を再現する手掛かりとし、実際に音を出しながら考えさせることで、思いや意図を明確にさせることができると考え、本主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 思いや意図をもって音楽をつくる力とは

(1) 思いや意図をもつとは

「29年解説」には、低学年の音楽づくりにおいて、「どのようにまとまりを意識した音楽をつくるかについて思いをもつとは、試しながら音楽をつくる過程において、このような音楽をつくりたいという考えをもつことである。」⁴⁾と示されている。また、中学年の音楽づくりにおいて、「どのようにまとまりを意識した音楽をつくるかについて思いや意図をもつとは、試行錯誤しながら音楽をつくる過程において、このような音楽を、このように構成してつくりたいという考えをもつことである。」⁵⁾と示されている。なお、「29年解説」で、音楽づくりにおける構成とは、「音楽の仕組み」を用いながら、音やフレーズを関連付けてまとまりのある音楽にしていくことであると示されている⁽¹⁾。これらのことから、音楽づくりにおける「思いをもつ」とは、「こんな音楽にしたい」という考えをもつことであり、「意図をもつ」とは、「このように構成してつくりたい」という「音楽の仕組み」に基づいた考えをもつことであるといえる。

(2) 音楽をつくる力とは

「29年解説」には、音楽づくりの活動は、創造性を発揮しながら自分にとって価値のある音や音楽をつくるものであり、「音遊びや即興的に表現する」活動と、「音を音楽へと構成する」活動からなると示されている⁽²⁾。本研究では、「音を音楽へと構成する」活動について取り扱う。この指導事項について、評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（小学校 音楽）（平成23年）の「A表現・音楽づくり」の評価規準の設定例では、表1のように示されている⁽³⁾。

表1 「A表現・音楽づくり」の評価規準の設定例

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
音楽の仕組みを生かし、音を音楽に構成することに興味・関心をもち、思いや意図をもって音楽をつくる学習に進んで取り組もうとしている。	音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、音楽の仕組みを生かし、音を音楽に構成するための試行錯誤をして、 <u>どのように音楽をつくるかについて自分の考えや願い、意図をもっている。</u>	音楽の仕組みを生かし、 <u>音を音楽に構成している。</u>

※下線は稿者による

音楽づくりの分野では、表1のように、三つの観

点で評価していくこととなる。下線のように、「音楽への関心・意欲・態度」の観点では、学習に進んで取り組もうとしているか、「音楽表現の創意工夫」の観点では、どのように思いや意図をもっているか、「音楽表現の技能」の観点では、音を音楽に構成しているかについて評価することが求められていることがわかる。津田正之（平成23年）は、音楽科における「音楽表現の創意工夫の評価」について、①音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じながら（音楽的な感受）、②音楽表現を工夫し（思考）、③どのように表すかについての思いや意図をもつ（判断）と整理し、さらに、思考・判断したことを言葉や音などで表すことが表現に当たると述べている。また、この①～③はいつも一定の順次で進むわけではなく、大切なのは、①②③全体を通して、音楽表現を創意工夫する力を育み、どのように表すかについての思いや意図を高めていくようにすることであると述べている⁽⁴⁾。これらの考えを基に、本研究における音楽づくりの学習過程を、図1のように整理する。

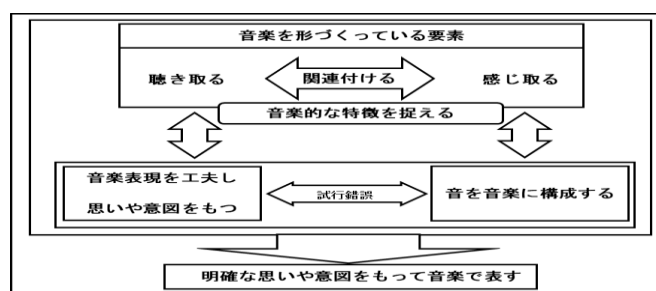


図1 音楽づくりの学習過程

図1は、音楽を形づくっている要素を聴き取ったり、その働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取ったりしたことを関連付けることで音楽の特徴を捉え、音楽表現を工夫し思いや意図をもち、音を音楽に構成することを試行錯誤することを表している。このような学習過程を経て、明確な思いや意図をもって音楽で表すことができるようになるということになる。

以上のことから、音楽をつくる力とは、「音楽を形づくっている要素に基づいて思いや意図をもち、音を音楽に構成する力」だと考える。よって、本研究では、「音楽表現の創意工夫」と「音楽表現の技能」の両観点を評価する。

(3) 思いや意図をもって音楽をつくる力とは

(1) (2) より、本研究における「思いや意図をもって音楽をつくる力」とは、「音楽を形づくっ

ている要素に基づいた明確な考えをもち、音を音楽に構成する力」であると定義する。

2 音楽的な見方・考え方を働かせることを促すワークシートについて

(1) 音楽的な見方・考え方を働かせるとは

臼井学（平成30年）は、中学校音楽科における「音楽的な見方・考え方」は、「①音楽に対する感性を働かせること。②音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉えること。③捉えたことと自己のイメージや感情、捉えたことと生活や社会、伝統や文化などに関連付けること。」の三つで構成されていると整理している⁽⁵⁾。小学校音楽科においても同様に捉えると、小学校音楽科における「音楽的な見方・考え方」は、「①音楽に対する感性を働かせること。②音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉えること。③捉えたことと自己のイメージや感情、捉えたことと生活や文化などに関連付けること。」の三つで構成されていると整理できる。

また、宮下俊也（2018）は、「音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉える」ということは、〔共通事項〕と深く関わり、特にアの「音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関連付けについて考えること」ができるようになることで、音や音楽の客観的な事実と、その質とともに捉えることができるようになる」と述べている⁽⁶⁾。このことから、本研究では、「音楽的な見方・考え方」の②「音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉えること。」が重要であると捉え、研究を進めていく。

「29年解説」には、聴き取ったことと感じ取ったこととの関連付けについて考えることの例として、「だんだん忙しい感じになってきたのに、急にのんびりした感じに変わったのは、速度がだんだん速くなった後に、急に速度が遅くなったから」と捉えるなど、速度の変化とその働きが生み出すよさや面白さ、美しさとの関係を考えることであると示されている⁽⁷⁾。この例は、速度の特徴を客観的に聴き取るだけでなく、感性を働かせて音楽を捉え、そう捉えられる理由を客観的な事実と関連付けて考えることができているといえる。

また、「29年解説」には、音や音楽は、「自己のイメージや感情」「生活や文化」などとの関連付け

について考えることによって、意味あるものとして存在することに加え、思いや意図をもって音楽表現する学習が一層充実すると示されている⁽⁸⁾。さらに、このような学習を積み重ねることによって、その後の人生においても生きて働くものとなると示され、音楽科を学ぶ本質的な意義の中核をなすと考えられている⁽⁹⁾ことから、「音楽的な見方・考え方」の③「捉えたことと自己のイメージや感情、捉えたことと生活や文化などに関連付けること。」も踏まえた上で研究を進めていく。

以上のことから、本研究では、音楽的な見方・考え方を働かせるとは、聴き取ったことと感じ取ったこととを関連付けて考えることであるとする。

(2) 音楽科においてワークシートを活用することについて

「29年解説」には、音楽づくりの指導の取扱いにおいて、「つくった音楽については、指導のねらいに即し、必要に応じて作品を記録させること。作品を記録する方法については、図や絵によるもの、五線譜など柔軟に指導すること。」⁽⁶⁾と示されている。また、津田（平成26年）は、課題を解決する学習過程では、必要に応じて、課題や課題の追求の道筋などを視覚化することは、時間とともに消えてしまう音楽において、楽曲との関わりから子どもが思考・判断したことの視覚化は有効な手立てになると述べている⁽¹⁰⁾。これらのことから、音楽科の学習では、目で見えないものを扱う特徴があるため、音や音楽、また、思考したものを視覚化する必要がある。視覚化することによって、音楽を再現する手掛かりとし、実際に音を出しながら思考することを促し、思いや意図を明確にさせることができると考える。

さらに、「29年解説」には、「つくった音楽を互いに共有し、思いや意図を伝え合う上で、つくった音楽を記録することは有効である。」⁽⁷⁾と示されている。また、鉄口真理子（2015）は、「子どもの内面の知覚・感受がワークシートに記述されることで、子ども同士で意見を交流させることが可能になる。子ども同士で意見交流する場を設定すれば、自分が知覚・感受していなかった点に気付き、互いに知覚・感受を広げ、深めることができる。」⁽⁸⁾と述べている。ここで述べられている知覚・感受とは、中学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編（平成30年）において、「『知覚』は、聴覚を中心とした感覚器官を通して音や音楽を判別し、意識することであり、『感受』は、音や音楽の特質や雰囲気などを感じ、受け入れることである。」⁽⁹⁾と示されており、

小学校音楽科における「聴き取ったことと感じ取ったこと」と同様の意味と考えられる。これらのことから、音や音楽、また、思考したことを周りの児童や教師と共有することは、聴き取ったことと感じ取ったこととを関連付けて考えることに広がりをもたせ、さらに深く考えることができるようになると考える。

(3) 聴き取ったことと感じ取ったこととを関連付けるワークシートの工夫

音楽づくりの学習過程においては、図1で示したように、聴き取ったことと感じ取ったこととを関連付けることで音楽の特徴を捉え、試行錯誤しながら明確な思いや意図をもつことが求められている。このような学習過程においてワークシートを活用することは、常に自分のつくる音楽の特徴を捉え、音楽を形づくっている要素に基づいた思いや意図をもって音楽をつくることに有効な手立てとなると考える。

津田（平成25年）は、聴き取ったり感じ取ったりしたことなどを図や絵などで表すことは、音楽的な特徴を捉えるための有効な手立てになると述べている⁽¹¹⁾。本研究では、聴き取ったことと感じ取ったこととを関連付けやすくするためのワークシートを2種類開発する。それらのワークシートを図2、図3に示す。

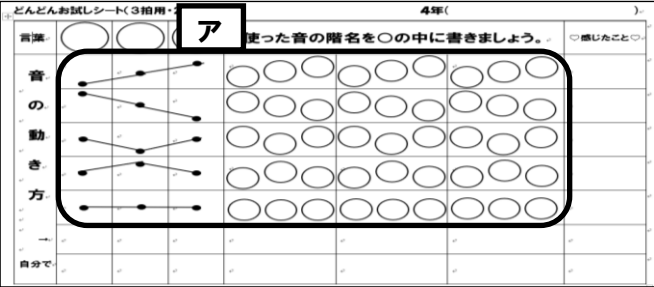


図2 どんだんお試しシート

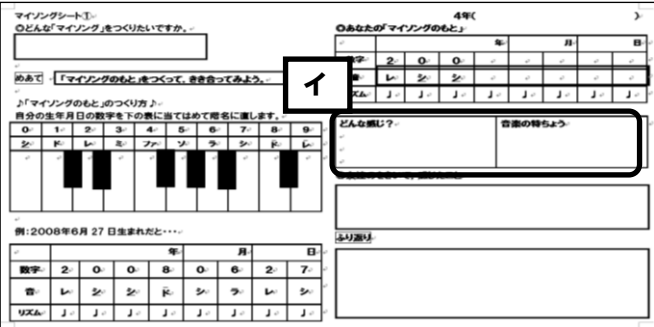


図3 マイソングシート

これらの図における、関連付けるための工夫の一

つ目は、絵や図、文字などを用いて、つくった音楽や聴き取ったこと、感じ取ったことを簡易的に示し、視覚的に捉えられるようにすることである。図2、アのように、音の高低を図で示したり、反復している旋律を同じ色の付箋の使用で表したり、図3、イのように、聴き取ったことと感じ取ったことを表で整理し、関連付けを線で結んだりする。これらの手立てにより、自己のイメージと音楽の特徴とを関わらせて表現することを促すようにする。

二つ目は、音楽を再現する手掛かりとすることである。そのために、ワークシート上で試行錯誤を促すための「どんだんお試しシート（図2）」を作成する。このシートは、実際に音を出しながら試行錯誤することを促し、その中で、また新たな気づきが生まれ、作品の質を高めていけるように活用する。このような過程を繰り返すことで、思いや意図を明確にさせることにつながると考えられる。

三つ目は、他者から得たヒントを明記することである。これは、主に、その時間の流れに沿って自分の考えをまとめる「マイソングシート（図3）」に記録する。このことにより、自分が気付かなかった新たな視点に気づき、さらに作品を工夫するきっかけとなると考えられる。

3 題材の構想

以上の考え方を基に、表2のように題材の構想を整理する。

表2 題材の構想

学習活動		ワークシートの活用	
1 2 3 4 5 6	マイソングをつくらう！ 〇生活の中にある身近な音楽を聴き、身近で簡単な音楽に興味をもつ。 〇どんな「マイソング」をつくりたいか考える。 〇生年月日を基に、「マイソングのもと」をつくり、聴き取ったことと感じ取ったこととを関連付けることで音楽の特徴を捉える。 〇自分のつくりたい音楽にするために、「マイソングのもと」をどう変えていくかを考える。	マイソングシート①（自己）	
	〇「マイソングのもと」から音を選び、いろいろと試しながら、短い旋律をつくる。 〇自分のつくった旋律の中から、気に入った旋律を二つ選ぶ。	マイソングシート②（自己・他者から）	どんだんお試しシート（旋律）
	〇二つの短い旋律を組み合わせて繰り返ししたりしながら、2色の付箋を使って、8小節の音楽をつくる。	マイソングシート③（自己・他者から）	どんだんお試しシート（反復・組み合わせ）
	〇8小節の音楽のリズムを変化させて、自分のつくりたい音楽に近づける。	マイソングシート④（自己・他者から）	どんだんお試しシート（リズム）
	〇終わった感じを工夫するために、身近な音楽の終わり方の特徴について整理する。 〇音楽が終わった感じになるように、リズムや旋律の動きを工夫して、「マイソング」を完成させる。	マイソングシート⑤（自己・他者から）	どんだんお試しシート（終わり方）
	〇思いや意図をもつてつくった音楽を発表し、お互いの作品のよさを認め合う。	マイソングシート⑥（自己・他者から）	

この題材では、「音楽的な見方・考え方」の③「捉えたことと自己のイメージや感情、捉えたことと生活や文化などに関連付けること。」に関連させて、生活の中にある児童にとって身近なスポーツ選手の応援歌やCMソングを、導入時に教材として取り扱う。また、つくったマイソングも、学校行事や他教科等に関連させ、活用させていくことを児童と共有し、学習を意味あるものとすると共に、思いや意図をもって音楽表現する学習が一層充実するように進めていきたい。

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

音楽的な見方・考え方を働かせることを促すワークシートを活用した学習を行えば、思いや意図をもって音楽をつくる力を育てることができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表3に示す。

表3 検証の視点と方法

	検証の視点	検証方法
視点1	思いや意図をもって音楽をつくる力が育ったか。	ワークシート 作品 アンケート
視点2	音楽的な見方・考え方を働かせることを促すワークシートは有効だったか。	ワークシート 行動観察 発言内容 アンケート

Ⅳ 研究授業について

- 期 間 平成30年6月27日～7月17日
- 対 象 所属校第4学年（1学級27名）
- 題材名 マイソングをつくろう！
- 目 標

音を音楽に構成することに興味・関心をもち、聴き取り感じ取ったことを基に、音楽の仕組みを生かし、どのように音楽をつくるかについて自分の考えや願い、意図をもって音楽をつくる。

Ⅴ 研究授業の分析と考察

1 思いや意図をもって音楽をつくる力が育ったか

(1) ワークシートによる分析と考察

本研究では、Ⅱ1(3)に定義した音楽をつくる力を評価するものとする。そのため、次の二つの方法で評価する。まず、マイソングシート①～⑥への記述から、音楽を形づくっている要素に基づいて明確な考え（思いや意図）をもっているかどうかを評価する。二つ目は、作品から、児童の明確な考え（思いや意図）を音楽として構成しているかを評価する。その評価の指標を図4に示す。

思いや意図をもっているか（音楽表現の創意工夫）	
評 価	指 標
A	音楽を形づくっている要素に基づいた自分の思いや意図を具体的に書いている。
B	音楽を形づくっている要素に基づいた自分の思いや意図を書いている。
C	音楽を形づくっている要素に基づいた自分の思いや意図を書けていない。
思いや意図を音楽として構成しているか（音楽表現の技能）	
評 価	指 標
A	思いや意図をつくった音楽に生かし、音楽の仕組みを生かして音楽をつくっている。
B	思いや意図をつくった音楽に生かしていることが認められる。
C	思いや意図とつくった音楽に整合性が感じられない。

図4 思いや意図をもって音楽をつくる力の評価の指標

また、表4は、図4の評価の指標に基づき、思いや意図をもっているか、また、思いや意図を音楽として構成しているかの評価の結果をクロス集計したものである。

表4 思いや意図をもつことと音楽として構成しているかについてのクロス集計

マイソングシートへの記述 \ 作品	A	B	C	総 計
A	4	9	2	15
B	5	6	0	11
C	0	0	1	1
総 計	9	15	3	27

表4より、マイソングシートへの記述について、評価B以上の児童は26名で、全体の96%であった。よって、ほとんどの児童は音楽を形づくっている要素に基づいた思いや意図をもつことができたといえる。また、作品において、評価B以上の児童は24名で、全体の89%であった。よって、ほとんどの児童

は思いや意図を音楽として表現することもできたといえる。さらに、ワークシートへの記述も作品においても評価B以上の児童は24名で、全体の89%であった。よって、思いや意図をもって音楽をつくる力が育っていると捉えられる。

しかし、ワークシートへの記述も作品においても評価Cの児童が1名いた。その児童は、観察や発言では思いをもっていると感じ取れていたが、ワークシートには「なんとなく」「ふつう」などの記述が見られ、音楽を形づくっている要素に基づいた表現には至らず、作品においても音楽として構成されているとは見取れなかった。

また、ワークシートへの記述は評価Aだが、作品においては評価Cの児童が2名いた。その2名の児童が、なぜ思いや意図を音楽として構成できなかったのか要因を考えてみると、演奏には思いや意図が表出されていても、記録として不十分であったことが考えられる。演奏の聴取を含めると、評価B以上になる可能性はある。演奏と記録のずれを生じさせない指導の工夫を、今後の課題とする。

さらに、ワークシートへの記述が評価Bで、作品においては評価Aの児童が5名いた。これらの児童は、言葉や文として、不十分な面が見られるので、普段から適切な言葉で表現できるように意識して指導していく必要があると考える。

(2) 事前・事後アンケートによる分析と考察

事前・事後アンケートでは、①音楽をつくるときに、「自分はこう表したい」というどんな願いや考えをもったことがあるか②そのために、どんな工夫をしたことがあるかについて調査した。アンケート①の判断基準を表5に、事前・事後アンケート①の結果を図5に示す。また、アンケート②の判断基準を表6に、事前・事後アンケート②の結果を図6に示す。

表5 アンケート①の判断基準

評価	基準
A	適切な言葉で、自分の表したい願いや考えを書いている。
B	自分の表したい願いや考えを書いている。
C	記入できない。

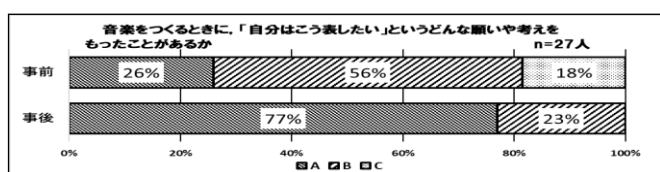


図5 アンケート①の結果

表6 アンケート②の判断基準

評価	基準
A	音楽を形づくっている要素に基づいた、具体的な表現の工夫を書いている。
B	音楽を形づくっている要素に着目しているが、具体的な表現の工夫を書いていない。
C	音楽を形づくっている要素に着目していない。

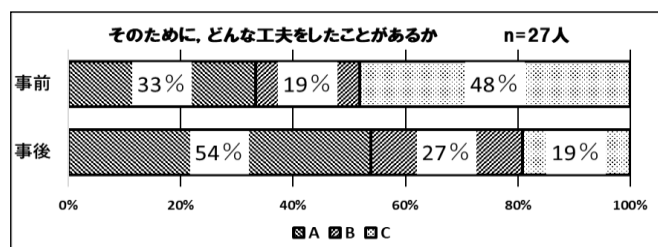


図6 アンケート②の結果

図5から、評価Aの児童が26%から77%に増えたことが分かる。授業を通して、適切な言葉で自分の表したい願いや考えを書くことができるようになったと考えられる。さらに、事前では未記入だった児童が8名いたが、事後では0名であり、何らかの願いや考えをもとうとしていることがうかがえる。

アンケート②において、評価Cの児童の記述を見ると、音楽を形づくっている要素に着目できない、又は、関連性のない回答をしてしまうという実態があった。アンケート①②において、②の評価がCからAに変わった児童aの記述を以下に示す。

事前	事後
①一番すごいのをつくってやる。 ②いろいろくふうした。	①おもしろい音楽が作りたいたい。 ②終わる時に音を高くしておもしろくした。

児童aの記述

児童aは、事前アンケートにおいて、音楽を形づくっている要素に着目することなく、「すごい」「いろいろ」と曖昧な表現をしていたが、事後アンケートでは、「おもしろい」音楽と具体的に表現し、そのための工夫として、音楽を形づくっている要素である「旋律」に着目し、「終わる時に高く」と表現できるようになった。

2 音楽的な見方・考え方を働かせることを促すワークシートは有効だったか

(1) 簡易的に示し、視覚的に捉えることができたか

第3時に使用したどんどんお試しシートの一部を図7、図8に示す。

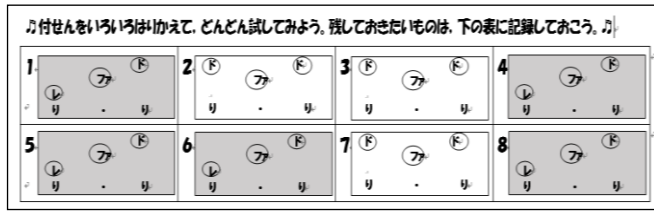


図7 どんどんお試しシートの一部

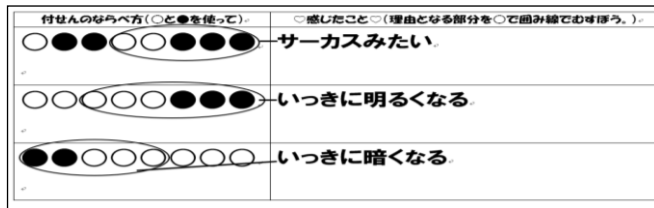


図8 どんどんお試しシートの一部

図7、図8のように簡易的に示すことで、児童がつくった音楽を視覚的に捉えられていると感じられた場面が、第3時で多く見られた。第3時は、第2時で選んだ二つの短い旋律を反復させたり組み合わせたりして、8小節の音楽のまとまりをつくるという学習であった。この学習では、2色の付箋を○と●で表すという点が簡易的であり、児童は主体的に音楽づくりができたと考えられる。また、どの部分でどう感じたかという関連付けも、図に丸をつけて線で結ぶことで、視覚的に捉えやすかった。

第2時に使用した児童bのどんどんお試しシートの一部を図9に示す。

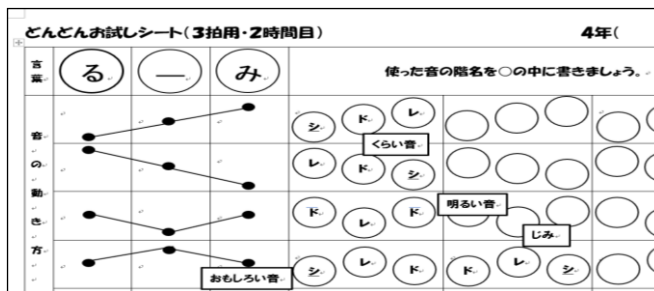


図9 児童bのどんどんお試しシートの一部

第2時は、自分の名前やニックネームなどを、どのようなリズムで表すか決め、そのリズムに合わせて、自分の音階の中から音を選んで短い旋律をつくるという学習であった。旋律の動きがよく分かるように図で示し、その旋律の動きと感じたことを関連付けられるように、感じたことは付箋に書かせ、その旋律のそばに貼らせた。児童bは、わずか3音でいろいろな音の動き方を試し、それぞれの並びについて「くらい」「明るい」「おもしろい」「じみ」

と感性を働かせて聴き取ったことと感じ取ったこととを関連付けることができた。

しかし、課題も明らかになった。示された音の上行下行と記録した階名が一致していないという児童が少なからずいたということである。児童に音高感が身に付いていないということが明らかになった。

(2) 試行錯誤が促せたか

「どんどんお試しシート」を使って、試行錯誤が促せたかどうかについて、事後アンケートの結果を図10に示す。

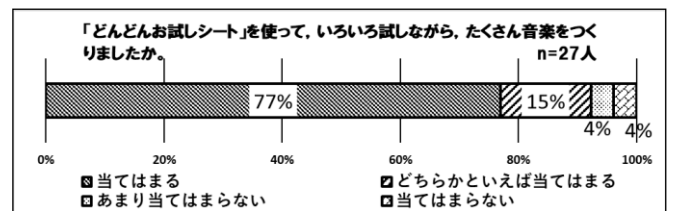


図10 アンケートの結果

図10より、「『どんどんお試しシート』を使っていろいろ試しながら、たくさん音楽をつくりましたか。」という問いに対し、肯定的な回答をした児童は、92%であり、「どんどんお試しシート」は試行錯誤を促すことができたといえる。試行錯誤を通して作品の質を高めていくことができたワークシートとして、児童cのどんどんお試しシートの一部を図11に示す。

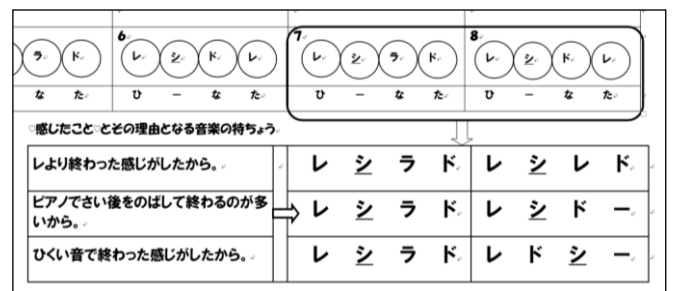


図11 児童cのどんどんお試しシートの一部

第5時は、8小節のまとまりのある音楽の終わりを工夫し、作品を完成させる学習であった。図11のように、最後の音にこだわって試していく児童cの様子が分かる。まず最後の音のレをドに変え、「レより終わった感じがしたから。」と記述している。次に、最後のレドをドーと伸ばし、「ピアノ（の演奏）でさい後をのばしておわるのが多いから。」と記述している。さらに、レシドーをレドシーに変え、「ひくい音でおわったかんじがしたから。」と記述している。児童cは、ただワークシート上で音を操

作しているのではなく、実際に音に出し、そこからまた新たに考えた音を試していることから、ワークシートで作品の質を高めるような試行錯誤が促せたといえる。しかし、事後アンケートに反して、ワークシートに少ししか書けない児童もいた。児童にとっては書くことが多く、どんどん試すには、書く分量を減らしたり、さらに簡易的にしたりする必要がある。

(3) 他者から新しい視点が得られたか

第1時と第6時は、グループでの聴き合いを、第2時～第5時は、学級全体の中で数人の児童の作品の聴き合いを行った。児童dのマイソングシート③の一部を以下に示す。

◎友だちせんりつの「それ、いいね！」
○○くんの終わり方がとてもよかった。
わけは、さいごに音がひくかったから終わった感じがした。

児童dのマイソングシートの一部

児童dは、付箋を並べて8小節の音楽をつくる際、自分がつくっている時には気付かなかった「終わり方」に友だちの演奏を聴くことによって着目し、そのよさについても気付くことができた。第3時で、「さいごに音がひくかったから終わった感じがした。」と記述した後、第5時の終わり方の工夫をした際の振り返りでも、「最後の終わり方がよくなるように音をひくくしてくふうをした。」と記述し、最終的な思いや意図は、「終わり方のいい音楽をつくるために、終わり方が一番よくなるように音をひくくした。」と記述している。他者から新たな視点を得た後、自分でその視点にこだわって最後まで活動する様子を見取ることができる。

児童d以外にも、他者から新しい視点を得たと思われるマイソングシートへの記述の一部を以下に示す。

- ・○○さんの音楽は、ちょっとぎざぎざでちばかずひこのおうえんかのようになっていたからおもしろく明るいうたになっていた。
- ・○○くんの音楽のリズムで、音がのびたり短くなったりして、とてもおもしろくなっていたので、お手本にしたいです。
- ・1人は暗く終わって、1人は明るく終わっていて、合っていたから、どちらの終わり方でもいいなと思った。

友だちの作品の「それ、いいね！」への児童の記述

児童の記述の中には、友だちの作品のよいと思う記述や、自分の作品に取り入れたいことを見つけた記述、音楽の仕組みについて自分の考えをまとめた

記述などがあり、聴き合うことによって新しい視点が得られるといえる。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

音楽的な見方・考え方を働かせることを促すワークシートを活用した学習は、思いや意図をもって音楽をつくる力を育てることに有効であることが分かった。

2 研究の課題

本研究では、ワークシートを活用しながら授業を進めていく過程において、書く分量が多くなったため試行錯誤する時間が少なくなるといった課題や、一部の児童にとっては児童の実態に合わなかったためワークシートへの記述が不十分であるといった課題が見られた。今後は、より児童の発達段階や実態に合わせたワークシートの改善をしていく。

【注】

- (1) 文部科学省（平成30年）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』東洋館出版社pp. 73-74に詳しい。
- (2) 文部科学省（平成30年）：前掲書pp. 23-24に詳しい。
- (3) 国立教育政策研究所教育課程センター（平成23年）：『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（小学校音楽）』p. 31に詳しい。
- (4) 津田正之（平成23年）：「音楽科における評価方法等の工夫改善」『初等教育資料10月号』東洋館出版社pp. 36-37に詳しい。
- (5) 臼井学（平成30年）：「生徒にとって意味のある音楽の授業実践に向けて（48）」『中等教育資料6月号』学事出版株式会社p. 59に詳しい。
- (6) 宮下俊也（2018）：「小学校音楽科における『見方・考え方』」宮下俊也『平成29年改訂小学校教育課程実践講座』ぎょうせいpp. 20-21に詳しい。
- (7) 文部科学省（平成30年）：前掲書p. 81に詳しい。
- (8) 文部科学省（平成30年）：前掲書p. 10に詳しい。
- (9) 文部科学省（平成30年）：前掲書pp. 10-11に詳しい。
- (10) 津田正之（平成26年）：「課題を解決する学習過程を工夫する五つのポイント」『初等教育資料9月号』東洋館出版社p. 27に詳しい。
- (11) 津田正之（平成25年）：「各教科等の特質を踏まえた言語活動の充実と事業改善（その2）」『初等教育資料7月号』東洋館出版社p. 17に詳しい。

【引用文献】

- 1) 文部科学省（平成29年）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）』p. 116
- 2) 文部科学省（平成30年a）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』東洋館出版社p. 13
- 3) 文部科学省（平成30年a）：前掲書p. 10
- 4) 文部科学省（平成30年a）：前掲書p. 44
- 5) 文部科学省（平成30年a）：前掲書p. 74
- 6) 文部科学省（平成30年a）：前掲書p. 133
- 7) 文部科学省（平成30年a）：前掲書p. 134
- 8) 鉄口真理子（2015）：「指導と評価の一体化のためのワークシート」小島律子『音楽科授業の理論と実践 生成の原理による授業の展開』あいり出版pp. 118-119
- 9) 文部科学省（平成30年b）：『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』教育芸術社p. 32